

〈巻頭言〉

## 公衆栄養学の発展のために

青木洋祐

疾病の予防・治療や健康の保持・増進に栄養が重要であることは古くから認識されていた。すなわち、ギリシャ時代の医聖ヒポクラテスは疾病の予防・治療に栄養が重要であることを説いたが、これは多くの疾病の発症機構および治療法が不明であった当時においても、毎日食べる食物の種類によって健康に変化が生じることを鋭い観察から見出した結果である。確かにヒトをはじめとする動物は生きている限り摂食するし、食物を摂取しなければ死亡してしまうことから食物が健康の保持に重要であることは容易に理解出来たが、食物中のどのような成分が体の機能にいかなる影響を及ぼすかを科学的に考えられるようになったのは医学およびその周辺科学が発達してからで、比較的新しい。

近年になって医学における病態生理学や疾病の診断・治療法の急速な進歩と平行して栄養学においても栄養素欠乏に基づく疾病の発症機構が次第に明らかになってきた。すなわち、19世紀終りから20世紀はじめにかけてのビタミン不足による疾病の発症機構の解明は栄養学的観察が出发点となり、生化学者の研究によってなされた。ところが、長寿社会を迎え、疾病構造が変化し、老化を基盤とする慢性疾患の予防や治療が問題になると従来の欠乏症の機構解明に用いた思考性や実験法があまり役に立たず、公衆栄養学的な鋭い観察と調査によりその原因が判明した例が少なくない。すなわち、高血圧発症と食物摂取との関係、発がんやその他の成人病発症と食物繊維摂取との関係は疫学的調査が出发点となったものであり、公衆栄養学的調査の重要性を示すものである。しかし、社会・経済学的色彩を強く取り入れた公衆栄養学では実験科学的研究法に慣れていない人々によって実験的な栄養学に比べて現在の状態で自己満足している傾向が見られないわけではない。今後更に公衆栄養学を発展させるためには鋭い自然科学的洞察と思考法に基づいた精力的な研究が望まれるところである。

---

(国立公衆衛生院栄養生化学部長)